

1991 創刊号

KISSO



木曾川文庫

治水事業の情報発信基地 木曾川文庫

水鳥が遊び、まぶしい陽ざしが川面を彩る木曾三川。

この恵まれた自然の宝庫には、

明るい笑顔と笑い声が満ちあふれ、

四季折々の情緒が景色を染める。

深く、厳しい自然の摂理とともに…。

木曾川文庫は、「木曾三川の文献の殿堂」をテーマに昭和62年オープン。

もっと広く、もっと深く、心の中へ…。

そして今、近代治水第二世紀に向かって、

木曾川文庫は機関誌「KISSO」を創刊。

新しいコミュニケーションの輪と育て、

河川を未来につなげていこう。

愛される木曾三川の明日を願って。



● 発刊にあたって



建設省中部地方建設局
木曾川下流工事事務所
所長 川見豊武

木曾川文庫は昭和62年、近代治水百周年記念事業の一環として設立されました。明治改修から百年目のこの機会に、木曾三川の恩恵とこの地域との関わり、治水事業の大切さを今一度見つめ直し、この際よく学んでみよう、と

さまざまな記念事業が開催されました。その中で、木曾川文庫は木曾三川に関する様々な図書を初め、治水の恩人・デレーケが残した明治改修にまつわる資料・設計図を収集。明治改修のシンボル・船頭平閘門地区に開設されたのです。

かつて木曾三川は乱流し、毎年のように人々は水害に苦しめられておりました。西に低い地形と尾張側の御用堤とで、美濃側の被害は一層深刻なものでした。このため、自衛的な輪中や水屋が発達しましたが、災害は軽減されませんでした。こうした中で、三川分流を目的とした宝暦治水が行なわれましたが、当時の技術力・財力などの制約により、完全分離には至りませんでした。

そして明治初期、地元の人々の強い要望によって明治改修は行なわれ、木曾三川分流を実現。治水上大きな効果を生み出しました。しかし他方、地域住民の生活に大きな影響を与え、用地買取りやそれに伴う住民・家屋の移転などが行なわれました。現代の治水事業の礎石をなす木曾三川分流工事は、こうした地域住民の協力のもと、達成したのです。

以後、大正改修や昭和の改修工事など、治水事業は徐々にレベルアップしてきました。現在では、木曾川や揖斐川の上流におけるダム建設や、長良川下流の大規模な浚渫工事並びに潮止堰としての河口堰の建設が着々と進んでいます。

その一方、氾濫原である流域の土地利用の変化も見逃すことができませ

ん。以前はその大半が農地であった流域も、社会の高度化に従って住宅地などに変貌したうえ、暮らしの水準が上昇し、水に弱い電子部品に取り囲まれ、それらに依存した生活が営まれていきます。しかし、経済社会の発展に見合った河川整備はまだ不十分で、我が国に匹敵する欧米諸国に比べますと、いたって低レベルなのが実情です。

従って、豊かさを実感しうる社会を築くためには、迫り来る高齢化社会以前の活力あるこの時期に、国土の基盤として、治水施設の整備を着実に図らなければなりません。

時として氾濫し、洪水を巻き起こす河川も、生活を支えるかけがえのない水資源であり、こうした水資源の開発も含め、また、自然豊かなふるさと木曾川をさらに未来へつなげていかなければなりません。

木曾川文庫は治水の歴史を収集し、先人の偉業をたたえとともに、今日的な治水のあり方を学ぶ場として、広く皆様にご利用頂いて参りました。しかし、もっと多くの人々に、河川の素晴らしさを知って頂きたい。もっと多くの方々に、治水の人切さをご理解頂きたい。そこでこの程、木曾川文庫機関誌「KISSO」を創刊し、広く各方面に情報発信を行なうとともに、お子様からお年寄りまで、様々な方が集い、やすらぎ資料館として、育てていきたいと願っています。

今後とも、「KISSO」のご愛読を願うとともに、木曾川文庫へのご支援・ご協力のほど、宜しくお願い申し上げます。

—— 収蔵物の概要 ——

濃尾平野特有の洪水制御や低地に暮らす人々の生活様式等の歴史を知るため、輪中・宝暦治水・明治改修等を重点的に、収蔵図書の拡充を図っています。

- 1) 県・市・村史・郷土史・藩政史・要覧等
- 2) 治水・利水史・災害史・利水組合史・電力史・工事（災害復旧）誌・研究論文等
- 3) 流域の自然・地理・文化・社会等
- 4) 一般書籍（小説・演劇・広報パンフ等）
- 5) オランダ人技師団及びデレーケに関する文献
- 6) 写真・ネガの整理保存（伊勢湾台風・木曾三川の自然）
- 7) 木曾三川に係わる映画・ビデオ

木曾川文庫は昭和62年、木曾三川治水百周年記念事業の一環として、設立されました。この年は、オランダ人技師ヨハネス・デレーケの指導による明治改修から数えて百年目。この大規模な工事により木曾三川分流は実現し、現代治水事業の礎石となっています。

しかし、治水の歴史は、明治改修に始まったことではありません。江戸時代の御用堤築造、薩摩藩士による宝暦治水など、木曾三川の歴史は水との闘いであり、堤防・護岸・水制・樋管などの治水施設は、先人たちの血の汗のじむような努力の遺産だと言えます。

木曾川文庫はこうした木曾三川に関する各分野の図書・研究論文の収集保存を図り、先人たちの偉

業を顕彰しています。また木曾川文庫敷地内の小パナマ運河・船頭平閘門は、治水の歴史を今に伝える重要な水門です。

木曾川文庫はこうした恵まれた環境のもと、今日的な治水のあり方を学ぶ場として、一般の方々や研究者の皆様に広くご利用頂いておりますが、さらなる成長を願ってこの程、木曾川文庫機関誌「KISSO」を創刊する運びとなりました。

ふるさとの川木曾三川はまさに治水の歴史であり、かけがえのない水資源です。「KISSO」では木曾三川の環境づくりと未来をテーマに、治水の歴史や民俗、景観を紹介。河川への理解を深めて頂ければ幸いです。



木曾・長良背割堤ケレップ水制

今年第8次治水事業5箇年策定の年です

第8次治水事業5箇年計画の基本方針

- 1) 安全な社会基盤の形成
 - 2) 水と緑豊かな生活環境の創造
 - 3) 超過洪水・異常渇水等に備える危機管理施設の展開
- これらを推し進める第8次5箇年計画での所要額(20兆円)の確保にご支援をお願いします。





【木曾・長良川背割堤】

木曾三川分流碑から船頭平開門まで約12kmの背割堤は桜や松並木が続く、サイクリングやハイキングなどには絶好の場所。両岸に広く見られるヤナギ林や、水辺の様々な湿性水生植物、カモ・サギ類を中心とした多くの野鳥が棲息し、まさに自然の宝庫です。この素晴らしい景観はバードウォッチングにも最適です。また春から秋にかけて、マリンスポーツの花が咲き、カメライストたちも集います。恵まれた自然と人が溶けあう瞬間—それが背割堤の姿です。



【治水神社・千本松原】

宝暦治水は薩摩藩平田朝負（ゆきえ）を総奉行に、実施されました。しかし慣れぬ他郷での治水工事は想像以上に厳しく、多くの犠牲を払い、大変な土木工事となりました。平田朝負はその責任を負い、自刃。治水神社はその平田朝負を祭神として、昭和13年に油島締切堤に建立されたものです。また、樹齢二百年を越える千本松原は、薩摩藩士が治水工事の完成を記念して、油島締切堤の上に「日向松」の苗を植樹したものだといわれています。堤防上に見事な景観をなす千本松原も、今では人々の憩いの場として親しまれています。



【国営木曾三川公園中央水郷地区センター】

愛知県・岐阜県・三重県にまたがる国営木曾三川公園は、日本で一番大きな国営公園で、中央水郷地区センターはその玄関口となるところです。治水記念館や展望タワーを中心に、治水の森・水屋など、木曾三川の歴史も楽しく学べ、わんぱく広場やピクニック広場など、その広大なスペースには、さまざまなレクリエーション施設がレイアウトされています。また、水と緑の館には、木曾三川の自然や人と水の関わりが展示され、まさに水と緑のアミューズメントパーク。憩いのひとときを演出しています。



せせらぎと草花の香り、アミューズメントパーク

自然の香りが漂う木曾川文庫周辺は、抜群のロケーション。治水の歴史を刻む名跡や、恋人や家族が集うアミューズメントパークなど、自然と人と、歴史が織りなすハーモニー。それぞれのドラマ、それぞれの美を咲かせて、豊かな実りを、そしてやすらぎを与えてくれる。

川のセレナーデが聞こえる。鳥のさえずりが景色を染める。春にはあたり一面に花が咲き乱れ、夏にはまぶしい太陽の光を浴びて、秋には、紅葉が川面を彩る。そして冬、冬景色が日本の情緒を告げる…。



【船頭平開門】

明治改修の木曾三川分流工事により、木曾川と桑名を結ぶ船路は閉鎖され、困難が予想されました。昔から、物資の輸送は船によるものが多かったからです。そこで、明治政府は木曾・長良の両川を連絡する開門の建設を決定し、現在の船頭平地内に開門が完成しました。開門の規模は、船なら一時に十隻、筏なら五枚を収容でき、明治35年の竣工から大正前期まで、年間約三万隻の船や筏が通開していました。しかし昭和8年の尾張大橋、同9年の伊勢大橋の完成により交通量は減少し、現在ではむしろ桜の名所として親しまれています。



【長島町・輪中の郷・ふるさとセンター】

木曾・揖斐・長良に囲まれた長島町は、海拔0m以下のところが多く、デルタ地域の沖積地に一輪中を形成しています。“輪中の郷”では、長島町特有の輪中をテーマに、郷土の歴史、文化、産業を紹介するとともに、失われつつある貴重な生活様式や生活技術を保存・伝承しています。また、映像ホールでは100インチの大画面ビデオプロジェクターを設置し、長島一向一揆を題材にしたオリジナルビデオを随時上映。当時の人々の悲しくも、力強い生きざまは、人々に深い感銘を与えています。

治水事業の輝かしい未来を願って

長い鎖国の眠りからさめた明治時代は、近代国家を目指し、目覚ましい活動を開始した。欧米諸国の先進技術を取り入れ、様々な国土開発が積極的に推進された。この時期、新政府は、国土の基盤である治水事業も着手。オランダ人技師ヨハネス・デレーケの指導による明治改修は、木曾三川分流を実現。水害を激減し、この地方に、平穏と安らぎをもたらした。今回、木曾川文庫機関紙を創刊するにあたって、文庫設立以来、ご指導、ご助言をいただいている先生方に、デレーケ並びに、木曾川文庫機関紙についてインタビュー。過去に学び、現代の治水のあり方を考察し、明日の治水事業を語って頂きました。そして、木曾川文庫機関紙が、そのメディアとなることを願って…。



花園大学文学部史学科教授
伊藤安男先生

学際のメッカとして積極的な活動を

オランダ人ヨハネス・デレーケの指導による明治改修は、明治20年から45年にかけて行われたのですが、明治32年には宿願の三川分流工事が完成し、同年4月に当時の首相山県有朋ら多数が出席して、三川分流成功式が盛大に行われました。この明治改修記念事業の一環として、木曾川文庫は設立されたのですが、河川事業にとって、治水史を学ぶものにとつて、とても意義あることですね。設立以前は建設省が保管していたデレーケの直筆による設計図などは大変貴重な物ですし、その足跡も現代の治水事業において、かけがいのないものばかりです。また、木曾川文庫がある船頭平開門は小パナマ運河として、産業遺産として、重要な存在です。もちろんその美しい景観も素晴らしい。このように、環境的に恵まれた立地条件の資料館は、全国でも希です。今後は行政の方々のご理解を頂き、野外博物館のようなスケールの木曾川文庫に成長してくれることを期待しています。また、文庫周辺の「国営木曾三川公園・中央水郷地区センター・水と緑の館」や長島町の「輪中の里・ふるさとセンター」などを結ぶような、ウオークラリーなどが企画されると楽しいですね。

木曾川文庫は河川を学ぶものにとつて、土木・歴史・地理・民俗など、あらゆる学問のメッカであるべきです。また、お年寄りから子供まで、様々な人々が集えるような、憩いのステージであるべきですね。そして、デレーケの偉業を理解して頂くために、川への思想を育てて頂きたい。日本人は、もつと川の哲学を養ってもらいたい。そういった意味でも木曾川文庫通信が創刊されたことは、意義深い。治水事業のコミュニケーションツールとして、今後に期待しています。

伊藤安男（いとやすお）

昭和4年名古屋市に生まれる。立命館大学文学部地理学科卒業。岐阜県立高等学校社会科教員、岐阜経済大学講師を経て、現在、花園大学文学部史学科教授、日本地理学会評議員、岐阜地理学会会長及び岐阜県郷土資料研究協議会会長。輪中研究に岐阜県芸術文化奨励賞受賞。
主な著書『輪中』『長良川をあるく』『岐阜県地理あるき』など。
主な論文『輪中の災害と治水』『輪中の水論』『蘭人技師デレーケと砂防』『明治前期の治水思想』『木曾川改修工事とその前史』など。



方野記念館館長
輪中文化を育てる会代表
方野知二先生

過去の偉業を学び、未来に伝えよう

現代社会は映像文化・ビジュアル文化全盛期。そうした趨勢の中で、木曾川文庫・機関誌の創刊は、非常に有意義ですね。治水事業の大切さをアピールする重要な媒体です。

私も輪中に暮らすものにとつて、水防とは生活を守る必須条件でした。水害に苦しみ、洪水との戦いが、その対策として輪中を作り出し、独特の文化を築き上げてきたのです。水との闘いーその長い歴史の中で、水屋・上げ舟・上げ仏壇・助命壇・堀田・伏越など、実に見事な暮らしの知恵を形成してきたのです。人間の歴史は、まさに自然のもたらす破壊と創造の繰り返し。ですから私たち人間は、自然への畏怖の念を持ち続け、自衛力を持たねばなりません。災害から身を守る意識こそ、暮らしの知恵を作り出していくのです。また一方、水は暮らしを支える大切な資源。しかしこの資源も無限ではありません。有限だからこそ、命を養う水ー即ち養水も無限でなければなりません。そのためにも昔に学ぶことが必要ですね。治水の恩人デレーケは、我が家とも深いゆかりがあります。明治時代・祖先の方野万右衛門が、この地を訪れたデレーケを案内しているのです。また、万右衛門は治水共同社を創設し、初代取締役に就任。治水事業への情熱を燃やしました。輪中で暮らす方野家は治水事業への意識が高かったのでしょうかね。

妻や妹を病気で亡くしても、日本の治水事業に情熱を燃やしたデレーケの功績には、計り知れないものがあります。現代に生きる人間は、こうした過去の偉業に学び、現在から未来へ繋げていかなければなりません。木曾川文庫はそうした意味からも学習的なセンターとして育ててほしいですね。治水の活動、歴史、民俗の総合センターとして、治水に取り組んでほしいと願っています。

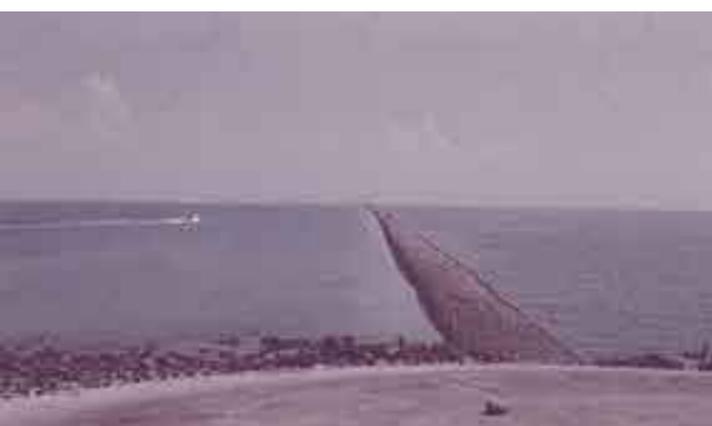
片野知二（かたのともじ）

昭和2年岐阜県に生まれる。県立第一工業学校卒業。岐阜師範特設研究科終了後34年間教職に就く。うち18年間は障害学級を担当。昭和45年には、輪中民族資料を集めた片野記念館を開設公開する。現在は神職、県清濁者相談委員、輪中文化を育てる会代表を兼任。片野記念館の運営を始め、地域社会へ大きく貢献している。
著書『岐南町史話』『ふるさと輪の内』『輪中文化会報』1〜4号など。

●ヨハネス・デレーケの生涯
オランダ人技師ヨハネス・デレーケ(1821~1913)は、明治6年9月明治政府の招聘によって来日、淀川をはじめ、庄内川・吉野川・多摩川などの河川、長崎港・東京港などの港湾の事業を指導しました。その態度はいたって勤勉で、日本の河川・港湾事業の近代化に一生を捧げました。このデレーケが明治11年から木曾川流域に幾度も足を運び、養老山地などの砂防工事や河川改修を指導。河道安定のためのケレップ水制、河口処理のための導流堤、船頭平開門や粗石堰堤などは今も機能しています。この偉業を成し遂げたデレーケは木曾三川の恩人。明治36年に帰国するまで、彼はその半生を日本の河川・港湾事業に捧げ、その功績は現代日本の治水事業の礎石となっています。



羽根谷粗石堰堤



木曾川河口導流堤

燈明さん祭り — 海津町万寿新田

今から百四十年も前のこと。その当時は、今のようにはっきりとした堤防がなかったため、海津町で何度も洪水がありました。

万寿新田では、堤防が切れないことを祈って、伊勢神宮からお札をもらい、大きな石で燈明台をつくり、樋門の上にお祀りをしました。村の人たちは、樋門を開いて水を入れる度、お祈りをしました。

ある大雨の夜、樋門の横の堤防に切れ目ができ、水が漏れ始めました。

その時です。燈明さんが切れ目にすっぽり落ちました。すると水漏れは

見事になくなり、堤防は無事でした。次の朝、堤防の様子を見にいった

村人たちは、堤防の切れ目に燈明さんが落ちているのを見つけました。

「ありがたいことだ。燈明さんが村を守ってくれたのだ」

と村人たちは大喜びでした。そのことがあってから、この村では、村中の人が集まってお祭りをするようになったとか。たくさんのお赤や白のちよ

うちんをつり、藁で作った大きな鯛や松茸、お菓子などを供えています

た。しかし現在では空の澄みきった満月のころに赤や白のちようちんを

つり、藁で作った50センチぐらいの鯉を二本笹の先につけて供え、お祭り

をするようになりました。大きい石で造られた燈明さんは、排水機場や堤

防の工事で何回も動かされ、今では『大神宮』と書かれた石碑が残ってい

るだけです。

海津郡のあちらこちらの堤防の上にある燈明さんは、昔、堤防が切れた

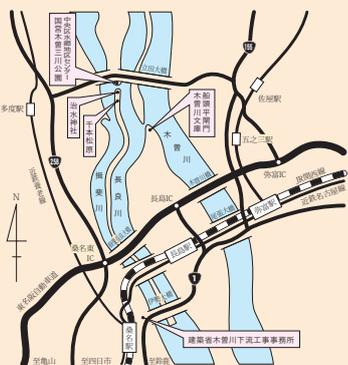
ところに建てられていることが多いそうです。そして、どの村でも同じよ

うなお祭りが行われています。

海津郡教育振興会編『海津のむかし話』より



木曾川文庫 利用案内



《開館時間》

午前9時～午後4時30分

《休館日》

毎週月曜日・祝祭日・年末年始

《入館料》

無料

《交通機関》

国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島ICから車で約30分
東名阪長島ICから車で約10分

《お問い合わせ》

木曾川文庫・船頭平閘門管理所
〒496愛知県海部郡立田村福原
TEL(0567)24-6233